



1

特集 1 座談会

- |             |   |
|-------------|---|
| 一学位取得者に聞く   | 2 |
| シリーズ「中学校訪問」 | 5 |
| 公開講座        | 6 |
| 夏期実習        | 7 |
| 九州地区高専体育大会  | 8 |
| 全国高専体育大会    | 9 |

次

## 特集2 「いま何が求められているか」

- |                |    |
|----------------|----|
| 一国際化時代と在外研修    | 10 |
| シリーズ「クラブ紹介」    | 14 |
| 英語弁論大会         | 15 |
| 四高専吹奏楽部合同演奏会   | 15 |
| 漫画甲子園          | 15 |
| 行事予定・ロボコン・プロコン | 16 |
| 編集後記           | 16 |

特集1

## 座談会

## 学位取得者に聞く

出席者 機械工学科 吉田 正道 助教授  
 工業化学科 氷室 昭三 助教授  
 ク 正留 隆 講 師

司会 高松 康生 校長



九州大学から、機械工学科の吉田助教授は今年の3月熊本大学から、工業化学科の正留講師は今年の1月九州大学から博士号を授与されておられます。先生方おめでとうございます。

先生方は3人とも修士課程を修了したあとすぐに、あるいは企業を経て本校に着任し、研究の努力を続けられて今回の学位取得になったわけですが、学位論文のテーマと、学位を取ろうという意識をいつごろ持たれたか、ということをお一人づつ伺っていこうと思います。

まず、氷室先生から。

**氷室** 学位論文の題名は『分子間相互作用力の異なるポリスチレン誘導体の熱力学的特性に関する研究』です。本校に着任してから、高専の教研集会等に出席しているうち、高専でもドクターが必要なんだな、という気がしてきました。それで頑張ってみようかなと思って、少しづつまとめた研究がようやく、学位論文としてまとまりました。

**校長** そうすると、思い立たれて何年くらいたったわけですか。

**氷室** 6~7年くらいだと思います。

**校長** 吉田先生はどうですか。

**吉田** 学位論文の題名は『二相二重管熱サイフォン内の流動と熱伝達に関する研究』で、その研究テーマに決定したのが7年前です。私が本校に着任したのは12年前になりますが、その当時は本校での様々な仕事に慣れるのに精一杯で、学位取得ということはほとんど考えていませんでした。しかし学会等で大学の先生方と話してい

るときに、学位をもっていないと対等にお話しできないという気持ちを強く感じはじめるようになりました。しかし、テーマがなかなか見つからず、3~4年間はどういう研究テーマがよいかを模索していましたが、4年前に内地留学の機会を与えていただき、その時にある程度きっちりした方針がたって、その後はそれに従って頑張ってきました。この留学が大きなきっかけとなって学位論文にまとめることができました。

**校長** 正留先生の場合はどうですか。

**正留** 私の学位論文の題名は『高分子膜型界面活性剤電極の開発とその応用に関する研究』です。修士での研究テーマが学位論文に値しないように思い、最初のころはテーマをどうしようかと考えていましたが、意外に発

展性があって学位論文にまとめることができました。

**校長** 先生の場合、テーマが決まってから何年くらいになるのですか。

**正留** 8年くらいです。

**校長** お話を伺う

と皆さん7~8年というかなり長い年月を要されたわけですが、高専は教育の比重が多く、その中で研究するということはかなり努力がいるし、また月日もそれだけかかるということでしょうね。

ところで、学位というのは単に研究すればいいというものではなく、学位論文にまとめるためにはどのようなことを研究したらいいかという、そのへんの選択が大事だと思います。そういう意味では指導者の方のアドバイスがどうしても必要だと思いますが、どうでしょうか。

**氷室** 私の研究は、熊大と九大の指導教官のご助言があつたからこそまとまっています。自分でいろいろな情報を集めて、研究としてまとめるということはなかなか難しいような気がします。

**吉田** 私の場合、修士のときは太陽熱関係の研究が盛

んな頃で、私もその研究を行っていましたが、だんだん下火になってくるし、発展性も期待できないのではないかという気がして、その頃いろいろ迷っていました。どういう研究をやれば大きな成果をあげて論文になるかということで、指導教官にもお話を伺ったりしてテーマが決まりました。私が選んだテーマというよりは、与えていただいたという感じが強いですね。

**正留** 私の場合は、センサーの開発の方はうまくいって実用化されております。しかし、その応答機構が分からなくて、かなり模索したのですが、恩師や共同研究者とディスカッション等をしながら、何とかまとめあげることができて、感謝しています。

**校長** 昔は違いましたが、現在では博士号というものは研究者として、一人でやっていくためのパスポートという位置づけですから、これからは他の人のアドバイスに期待することなく、自分で研究を進めていかなければいけないわけで、広くその分野の研究の現状・技術の現状・学問の現状を知って自分でテーマを見つけていく、そういう能力が要求され、一層大変だと思います。研究は、テーマ選びが一番大事ですからね。

ところで、研究の中身のことを伺ってよろしいですか。

**氷室** 私の研究を

簡単に言いますと、高分子の物性の研究です。高分子とは分子がいっぱいつながった化合物のことですが、意外と我々の身の回りにたくさんあります。例えば木や紙、洋服、私の体もそうなのですが、髪の毛から爪の先まで高分子でできています。私の研究では、機能性高分子の中からいくつかを取りあげて、分子同志がどういうふうにお互いに作用しあって機能性を発現しているかというそのメカニズムを明らかにしたものです。将来的には、生体の高分子、例えば遺伝子であるDNAも機能性をもった高分子ですが、このような生体の高分子の機能性を工学的な面に応用できないかということを考えております。

**校長** そうすると、例えば構造と機能との関係が分かってくれば、逆にこういう機能をもった物質をつくるためにはこういう構造をもたせる必要があるというようなところへもつながっていくんですね。

**吉田** 先生の研究を紹介してください。

**吉田** 热を移動させる方法には、冷却水を循環せたり、ファンを回して強制的に熱を奪う方法の他に、熱サイフォンやヒートパイプを用いて外部の動力を用いず熱

を移動させる方法があります。この熱サイフォンにはいろいろな種類があり、私が行った研究の対象は本体が二重管構造となった二重管サイフォンで、水やフロンなどの作動流体の沸騰による浮力を利

用して熱を移動させる仕組みになっています。二重管の場合、熱移動量の限界を高めることができるという特徴があるわけで、なぜそのようになるのか、中の流動状態を詳しく調べて、二重管熱サイフォン内部のメカニズムを解明する基礎的な研究を行ってきました。

この熱サイフォンは、地熱エネルギーを地上に引っ張ってくるときなどに応用できると考えています。

**校長** 北国で雪を溶かすのに、二重管でない形の熱サイフォンで地熱をもってくるというような実用例があります。

それでは正留先生にお話を伺いましょう。

**正留** 界面活性剤物質は環境汚染の代表的な物質です。1960年代後半から70年代にかけて、特に化学工業が公害の元凶といわれた時代に、センサーを作ろうということで研究が始まったのですが、私が研究を始めた80年代の後半でも分析法の開発は非常に重要な課題であったわけです。従来の分析法では非常に時間がかかるし面倒で、いろいろな問題があったため、試料にセンサーをつけるだけで簡単に測れるものを開発してきました。ppb( $10^{-6}$  g/l)オーダーくらいのところまで測ることができるということで、下水や河川水に応用が可能で実用化されていますし、病院などの臨床検査室でも使われています。

従来のセンサーはイオン交換体が必要ですが、私が開発したものはそれが必要でない単純なセンサーで、寿命も半年以上で長く、測定に優れたセンサーです。なぜ感応膜にいれなくても応答するかということを研究して、一部わかったところまでが学位論文の成果で、これからわかったところをとっかかりにして解明していくことが目標です。

**校長** 専門外の者にはイメージが浮かびにくいので伺いますが、センサーというのは化学物質なのですか。また、どのような形でできているのですか。

**正留** 膜です。膜自体が界面活性剤に感じ、膜電位に変換してそれを濃度に変換するという原理です。

**校長** 病院では何を調べるのですか。

**正留** 例えば血液中の代表的なイオンにはナトリウムイオン、カリウムイオン、塩化物イオンがあります。バ



リノマイシンという抗生物質はナトリウムよりもカリウムに対して10000倍感知する物質で、ナトリウムが共存していてもカリウムだけを分析できるわけです。生体内の血液では、ナトリウムとカリウムの比が似通っているので従来の分析法では難しく、選択性の高いバリノマイシンなどを用いて可能となります。

**校長** お話を少し専門的で難しくなってきましたが、研究の成果が社会のいろいろな面で役に立っていることは大変ありがたいことだと思います。

学位をとるまでの間に苦しかったこと、大変だったことについて伺っていこうと思います。

正留先生はいかがでしたか。

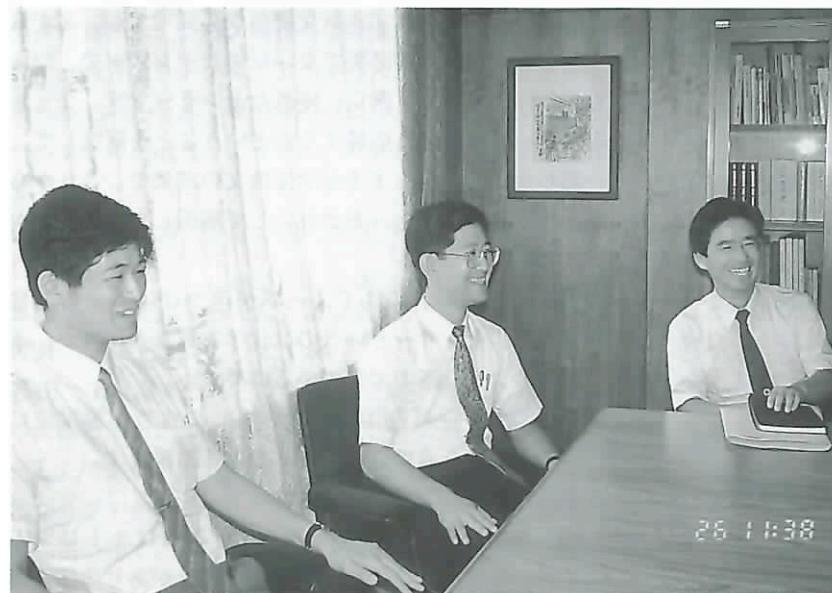
**正留** 私の場合はセンサーの開発までうまくいったわけですが、学位論文としてまとめるためには応答メカニズムを解明しなければいけないということで、なかなか解明の糸口さえつかめないという状態が2~3年続きずいぶん苦しい思いをしました。

**吉田** 私の場合は、テーマが確定せず研究が進まなかつた3~4年間が一番苦しいときでした。そして研究のための安定した時間がとれずに苦労しました。その時に感じたことは、研究に集中するために頭の切り替えをうまくしなければいけないということです。

**校長** 研究というものは集中してやらないとなかなか進まないものだから、頭の切り替え、気持ちの切り替えが素早くできるかどうかは大事な問題ですね。

水室先生はどうですか。

**水室** 高専は教育的なことが多くて、研究する時間がなかなかとりにくいのですが、今振り返ってみるといろいろな仕事をやっていたから研究に集中できたのかもしれません。研究は夜間にしていたので睡眠時間が少なくなることがありました。いかに有効に自分の時間を使うかということが一番大事なことではないかなと思います。



す。

**校長** 正留先生の話にあったように、研究というのは必ずしも夢中になって没頭して時間をかけなければ答えがでるというものではなく、従って思ったとおりの答えがでこないときが一番悩みますね。

最後に、高専の先生方は厳しい条件の中におられるけれども、常に研究努力をしていただかねばなりません。これから学位取得をめざす若い先生へ、どういう面に気をつけ、努力したらよいか、学位取得経験者としてアドバイスを聞かせてください。

**正留** 大学に比べれば時間は少ないので、仕事の合間になどに頭を切り替えて研究に集中して時間を有効に作り出すことと、テーマの選択が一番大きいかなと思います。

**吉田** 一番大切なことは、粘り強い意志をもつことだと思います。ずっと高専にいて慣れてしまうと少しづつそういう気持ちが薄れてきて、もうこれでいいかなという気持ちになりがちなんですが、どうしても学位を取るんだという強い意志をもち続けることで頑張れると思います。

**水室** 我々の研究費はものすごく少ないと思います。研究するにはどうしてもお金がかかるので、科学研究費やその他の奨励金に応募して研究の環境を整えておくことも肝心だと思います。

**校長** 研究をやるには時間もお金も大切です。でも、これは自分がやりたいことだから、自分の力でやろうという意識でスタートすることが、まず大切でしょう。

私としては、実践的技術者の育成を行う高専にあっては、学位論文につながるような基礎的課題に関する研究と合わせて、地域の産業界で直面しておられるような身近な実際の技術的課題を対象とした研究もぜひやっていただきたいと思います。そのような形の产学共同活動を通じて地域に貢献していくことも、高専の大切な役割の一つであると考えるからです。

最後に、3名の先生方には、それぞれのご研究をさらに発展させていただいて、本校の活性化に今後とも貢献してくださいとお願いします。

長い時間ありがとうございました。

## シリーズ

# 中学校訪問

## —高田中学校(三池郡高田町) —

**Q** まず高田中学校の沿革からお話を聞かせてください。

**A** 高田中学校は、昭和22年、三池郡高田村立高田中学校として産声を上げ、最初岩田小学校に併置されていましたが、山門炭坑岩津工場の土地建物を購入して、独立し、現在に至っています。

**Q** 教育目標は何でしょうか。

**A** 一言で言えば、校訓になると思います。具体的には、「自主自律・協同責任・勤労愛好」です。なかでも、特に力を入れているのは、自律、責任、勤労です。進んで学習に取り組み、責任ある行動をとり、勤労を尊ぶ、そういう生徒が育つのを願っています。

私は、子供は小さい「大人」だ、という考えを持っています。ですから、保護者の方に、子供には下手な隠してなどせず、家庭の経済状況などをきちんと教えてください、とお願いしています。子供は、自分のおかげでいる立場を認識したうえで、自分の考え方で責任ある行動が取れるはずだ、と思っています。

**Q** 最近のトピックスを挙げてもらえませんか。

**A** それはやはり、長髪を許したことではないでしょうか。ご承知と思いますが、一般に、都市部では長髪を認め、郡部では長髪を禁止しています。本校も、これまで、男子は坊主刈りということで指導してきました。しかし、隣接の大牟田は長髪を許可しています。そういうことで、生徒会からの強い要望がありました。保護者会も許可することに異論はありませんでした。最近は、坊主刈りに対し人権問題が云々される時代です。本校は、校訓として、自主自律を謳っていることもあります。9月1日から長髪を認めるにしました。

ところで、学校における坊主刈りですが、これは、昔、教育がお寺を中心に行われてきた名残ではないかと思います。明治政府が学校制度を設けて以来、教育現場では、長いこと教育を受ける側の坊主頭が定着してきたわけ



体育館

ですが、もうばつ  
ぼつ考え直す時  
期にきているよ  
うな気がします。

板橋良登校長  
遠からず、中学校における坊主頭は無くなるのではないか  
でしょうか。

**A** クラブ活動の状況はいかがでしょうか。

**Q** クラブ活動は総じて活発ですが、なかでも、特に活発なのは、剣道、習字、プラスバンドではないでしょうか。剣道は、地元に剣友会という本校のOBが中心になつた団体がありまして、そこと一緒に練習しているせいか、県大会出場は当たり前という状態が続いています。最近でも、昨年一昨年と連続して全国大会に出場しています。習字は、過去、西日本大会で文部大臣賞を受賞したことがあります。正確に数えたこともありませんが、10回以上あるのではないかでしょうか。プラスバンドは、高田町内で重宝がられ、町が行ういろいろな行事にかりだされています。そう言えば、昨年、200mバタフライで全国優勝した子もいます。

**Q** 最後に、高専についての印象などお聞かせください。

**A** 高専と言うと、すぐロボットコンテストを思い浮かべます。私自身メカが好きなこともあります、NHKの放送は楽しんで見ています。有明はいつも久留米と争っているみたいですね。それから、高専から大学に編入学できることに興味を持っています。工学に興味を持った者には高専から大学に進む道もあるぞ、とよく生徒に話します。日本が豊かになったと言っても、全員が高校大学と進めるわけではありません。生徒にとりいろいろな選択肢があることは望ましいことです。そういう意味で高専の存在は大きいと思います。

門を入ると、レンガ模様の窓がほとんどない大きな建物がそびえている。講堂かな、と思い尋ねると、体育館とのことである。ただ、普通の体育館が2棟できるほどの金を要したそうだ。今年3月竣工したばかりでまだ新しい。門の右手には、同時に竣工した2階建のコンピュータ棟が建っている。校地面積35,178m<sup>2</sup>、職員数48名、生徒数720名（男子370、女子350）、学級数20が高田中学のデータである。

私たちの質問にていねいに答えていた板橋良登校長先生に感謝を申し上げる次第である。

（聞き手 瀬戸洋・三宅昭春）

# 公開講座

## 情報処理領域に向けてのパソコン講座

期 日：平成5年5月22日～6月19日

(毎週土曜日13:30～16:30)

生徒達にも絵を描かせたり、文を作らせたりするのが手軽にできるような気がして、コンピュータの授業が楽しみになってきました。

(駿馬南小学校教諭)

初めてで、受ける前は“なじめない”“大変だ”と緊張しましたが、楽しく受講できましたことに感謝します。

(明光学園中学校教諭)

## 楽しい電子工作教室

期 日：平成5年7月26日～7月27日

(9:00～15:00)

友人の勧めもあって軽い気持ちで講座を受けましたが、実際にやってみてとても楽しかったです。今後もこんな企画があればいいなと思いました。

(延命中学校中学生)



## やさしい化学実験講座

期 日：平成5年7月27日～7月28日

(9:00～15:00)

今までけっこう実験は好きだったけれど、この講座に参加して今までよりもっと好きになりました。実験は考えることも大切だけれど、実際にやってみることがもっと大切だという発見をしました。

(玉陵中学校中学生)



## パソコンお絵描き講座

期 日：平成5年7月29日～7月30日

(9:00～15:00)

暑中見舞いの絵入りのハガキができるうれしかったです。今年の暑中お見舞いに使いたいと思います。

(玉陵中学校中学生)

学校では、キーボードを使ったけど、ここではマウスを使って絵が描けたので、とても楽しかった。

(瀬高中学校中学生)

## お母さんのためのワープロ教室

期 日：平成5年8月2日～8月4日

(9:00～15:00)

どっぷり家庭の中におさまって、17年。硬くなってしまったおばさんの頭は、なかなかやわらかくなってくれませんでしたけど、ひさびさに学生時代にもどったような、とても刺激のある3日間でした。

これからは、主人のワープロも私が共有できるくらい、上手になりたいと思っています。

(一般市民主婦)



## パソコン操作技術講座

期 日：平成5年8月2日～8月6日

(13:30～16:30)

パソコンの優れた能力は、人、書籍を通じて聞き知っていましたが、実際に操作を自分で体験してみて、その能力に驚きました。

(一般市民男性)

大変だと思いますが、生涯学習を考えるうえからも、今後もいろいろな講座を開いて下さい。

(一般市民主婦)

# 夏季実習

## 仕事と責任

4M 荒木 伸一郎

7月26日より12日間、横浜の千代田商工（株）で実習を行った。この会社は石油化学、ファインケミカル、食品製造等のプラント建設を行っている。この会社では、これら業務の遂行のためプロジェクトチームが組まれ、積算、見積りから始まり、成約後の設計、施工計画、機器資材の調達、発注品の受け入れ検査、納期管理、建設工事の施工、試運転までを通して担当する。しかし、小形プラントになるとチームでなく、一人でこれら全部を行うということであった。

最初の一週間は業務内容やプラント建設に関する講義で、石油精製プロセス等の興味深い話が印象に残った。その後はCADで小形ベッセル組立図を書いた。学校で習ったCADと違い大変扱いにくく、失敗の連続であったが、指導技師が親切であったこと、内容が簡単であったため、割合早く図面を仕上げることができたのは幸いであった。最後は、鹿島臨海コンビナートを見学させてもらった。この鹿島は日本の基幹産業である鉄鋼、電力、石油化学等約150社の工場が集まっている巨大コンビナートで、その大きさに度肝を抜かれた。さらに実際のプラント建設の現場を見せてもらい、感動の連続であった。何もないところに石油プラントやケミカルプラントが建設されて行く驚きは、私の一生忘れられない思い出になるであろう。これらのプラントには設計者独自のオリジナリティが反映され、自分にしかできないプラント、自分独自の考えに基づいたプラント設計も可能であると聞かされ、これ以上やり甲斐のある仕事はないと思った。

その反面単に知識だけではなく、その人の信用、人格的なことが大変重要な要素であるように感じられた。

社会に出ればいろいろな責任を負わされるだろうが、この責任を果たせる人になるのは大変なことだろうなと思った。

今回の実習で得たこの気持を大切に、今後の学生生活を送ろうと思う。



## 技術者として必要なもの

4E 猿渡 康隆

8月17日から9月3日まで、茨城県日立市にある（株）日立製作所日立工場で実習を行った。ここは日立製作所発祥の工場で、タービン、発電機、モータ等の重工業機器から原子力機器、圧延機械、パワーエレクトロニクスまで幅広い機器の製作を行っている。この工場で私は原子力計画部原子力情報制御センターに配属され、原子力プラント給水制御系のモデル設計と解析を行った。内容は原子炉内には、常に給水し、常に水位を一定に保つための弁があり、これまで油圧式であったのを、現在建設中のプラントから空気圧式に変更するため、その弁をモデル化し解析することである。私は原子力や解析に詳しいわけではなかったので、どこから手をつけてよいかわからず、解析には大変時間がかかった。また「原子炉の一部を私が担当しても良いだろうか？もし事故を起こしたら…」などの不安な気持にもなった。しかし、苦労して仕上げた分完成させたときの嬉しさは格別であった。

この実習で、原子力についての知識だけではなく、企業という組織はどのようなものか、会社で“もの”をつくり出すということ、仕事をするということはどのようなものかを学ぶことができた。近い将来社会に出て技術者として仕事を持つ、働くために必要なもの・・・もちろん知識も必要なものの一つだが、大切なのは常に社会が生み出す技術への夢をいろいろな角度から見つめて、それを“カタチ”にする意欲と、人間一人一人が持っている独創性が最も必要であるということを強く感じた。

今後、学生の目で会社を覗くことができる機会のない私にとって、本当に貴重な体験であった。今回の実習で学んだらゆることを生かして、残りの学生生活を有意義に送りたいと思っている。



## 九州地区高専体育大会

# 青春…そして感動！

平成5年度の九州地区高専体育大会が、下記のとおり行われました。

バスケットボール、バドミントンの団体優勝をはじめ、11種目の個人優勝など、すばらしい成績を残しました。主な成績は次のとおりです。

### ■ 第30回九州地区国立工業高等専門学校体育大会

7月23日(金)～25日(日) 主管校／久留米高専 担当校／北九州高専・佐世保高専

#### (久留米会場)

陸上競技 総合		
男子100M	2位	5C 八井
男子200M	4位	3A 松尾
男子400M	1位	5E 田中
男子800M	5位	5A 本郷
男子4×100M・R	2位	(5C 八井・5E 田中・3A 松尾・5C 白石)
男子4×400M・R	1位	(5M 龍野・5C 白石・3A 松尾・5E 田中)
男子走高跳	4位	2I 山田
男子砲丸投	1位	3A 渋谷
男子円盤投	5位	3E 中島
男子やり投	3位	2I 山田
女子走幅跳	4位	1A 宇都宮
女子砲丸投	4位	1A 井上
女子1500Mオープン	3位	1A 宇都宮
女子4×100M・R	5位	(1I 磐田・1A 宇都宮・2A 井上・1A 柳川)
ソフトテニス	予選リーグ敗退	

#### バドミントン 団体 優勝

男子シングルス	3位	5I 立石	5E 牧嶋
男子ダブルス	1位	5I 立石	4E 城戸
	2位	4E 釜田	5E 牧嶋
女子シングルス	3位	3A 岡部	
女子ダブルス	1位	3A 平田	3A 宮木
水泳	総合 準優勝		
男子400M・R	3位	(1I 野田・2E 米田・3M 永松・4A 小野)	
男子800M自由形	4位	5E 岡本	
男子走高跳	5位	4I 別府	
男子砲丸投	1位	3A 渋谷	
男子円盤投	5位	3E 中島	
男子やり投	3位	2I 山田	
女子走幅跳	4位	1A 宇都宮	
女子砲丸投	4位	1A 井上	
女子1500Mオープン	3位	1A 宇都宮	
女子4×100M・R	5位	(1I 磐田・1A 宇都宮・2A 井上・1A 柳川)	
ソフトテニス	予選リーグ敗退		

#### バドミントン 団体 優勝

男子シングルス	3位	5I 立石	5E 牧嶋
男子ダブルス	1位	5I 立石	4E 城戸
	2位	4E 釜田	5E 牧嶋
女子シングルス	3位	3A 岡部	
女子ダブルス	1位	3A 平田	3A 宮木
水泳	総合 準優勝		
男子400M・R	3位	(1I 野田・2E 米田・3M 永松・4A 小野)	
男子800M自由形	4位	5E 岡本	
男子走高跳	5位	4I 別府	
男子砲丸投	1位	3A 渋谷	
男子円盤投	5位	3E 中島	
男子やり投	3位	2I 山田	
女子走幅跳	4位	1A 宇都宮	
女子砲丸投	4位	1A 井上	
女子1500Mオープン	3位	1A 宇都宮	
女子4×100M・R	5位	(1I 磐田・1A 宇都宮・2A 井上・1A 柳川)	
ソフトテニス	予選リーグ敗退		

#### バドミントン 団体 優勝

男子シングルス	3位	5I 立石	5E 牧嶋
男子ダブルス	1位	5I 立石	4E 城戸
	2位	4E 釜田	5E 牧嶋
女子シングルス	3位	3A 岡部	
女子ダブルス	1位	3A 平田	3A 宮木
水泳	総合 準優勝		
男子400M・R	3位	(1I 野田・2E 米田・3M 永松・4A 小野)	
男子800M自由形	4位	5E 岡本	
男子走高跳	5位	4I 別府	
男子砲丸投	1位	3A 渋谷	
男子円盤投	5位	3E 中島	
男子やり投	3位	2I 山田	
女子走幅跳	4位	1A 宇都宮	
女子砲丸投	4位	1A 井上	
女子1500Mオープン	3位	1A 宇都宮	
女子4×100M・R	5位	(1I 磐田・1A 宇都宮・2A 井上・1A 柳川)	
ソフトテニス	予選リーグ敗退		

#### バドミントン 団体 優勝

男子シングルス	3位	5I 立石	5E 牧嶋
男子ダブルス	1位	5I 立石	4E 城戸
	2位	4E 釜田	5E 牧嶋
女子シングルス	3位	3A 岡部	
女子ダブルス	1位	3A 平田	3A 宮木
水泳	総合 準優勝		
男子400M・R	3位	(1I 野田・2E 米田・3M 永松・4A 小野)	
男子800M自由形	4位	5E 岡本	
男子走高跳	5位	4I 別府	
男子砲丸投	1位	3A 渋谷	
男子円盤投	5位	3E 中島	
男子やり投	3位	2I 山田	
女子走幅跳	4位	1A 宇都宮	
女子砲丸投	4位	1A 井上	
女子1500Mオープン	3位	1A 宇都宮	
女子4×100M・R	5位	(1I 磐田・1A 宇都宮・2A 井上・1A 柳川)	
ソフトテニス	予選リーグ敗退		

#### バドミントン 団体 優勝

男子シングルス	3位	5I 立石	5E 牧嶋
男子ダブルス	1位	5I 立石	4E 城戸
	2位	4E 釜田	5E 牧嶋
女子シングルス	3位	3A 岡部	
女子ダブルス	1位	3A 平田	3A 宮木
水泳	総合 準優勝		
男子400M・R	3位	(1I 野田・2E 米田・3M 永松・4A 小野)	
男子800M自由形	4位	5E 岡本	
男子走高跳	5位	4I 別府	
男子砲丸投	1位	3A 渋谷	
男子円盤投	5位	3E 中島	
男子やり投	3位	2I 山田	
女子走幅跳	4位	1A 宇都宮	
女子砲丸投	4位	1A 井上	
女子1500Mオープン	3位	1A 宇都宮	
女子4×100M・R	5位	(1I 磐田・1A 宇都宮・2A 井上・1A 柳川)	
ソフトテニス	予選リーグ敗退		

#### バドミントン 団体 優勝

男子シングルス	3位	5I 立石	5E 牧嶋
男子ダブルス	1位	5I 立石	4E 城戸
	2位	4E 釜田	5E 牧嶋
女子シングルス	3位	3A 岡部	
女子ダブルス	1位	3A 平田	3A 宮木
水泳	総合 準優勝		
男子400M・R	3位	(1I 野田・2E 米田・3M 永松・4A 小野)	
男子800M自由形	4位	5E 岡本	
男子走高跳	5位	4I 別府	
男子砲丸投	1位	3A 渋谷	
男子円盤投	5位	3E 中島	
男子やり投	3位	2I 山田	
女子走幅跳	4位	1A 宇都宮	
女子砲丸投	4位	1A 井上	
女子1500Mオープン	3位	1A 宇都宮	
女子4×100M・R	5位	(1I 磐田・1A 宇都宮・2A 井上・1A 柳川)	
ソフトテニス	予選リーグ敗退		

#### バドミントン 団体 優勝

男子シングルス	3位	5I 立石	5E 牧嶋
男子ダブルス	1位	5I 立石	4E 城戸
	2位	4E 釜田	5E 牧嶋
女子シングルス	3位	3A 岡部	
女子ダブルス	1位	3A 平田	3A 宮木
水泳	総合 準優勝		
男子400M・R	3位	(1I 野田・2E 米田・3M 永松・4A 小野)	
男子80			

## 特集② いま何が求められているか

### 国際化時代と在外研修

**出席者** 建築学科 新谷 肇一 教授 (1989年8月～11月 英国 北ロンドン工科大学他欧州各国)  
**工業化学科** 川瀬 良一 助教授 (1992年5月～1993年3月 米国 ニューヨーク州立大学)  
**建築学科** 上原 修一 講師 (1991年5月～1992年3月 米国 パデュー大学)  
**司会** 一般科 高田 実 講師

**司会** 本日はお忙しいところお集まりいただき、ありがとうございます。近年「国際化時代」ということが叫ばれていますが、きょうは在外研修の持つ意味について話し合おうということでお集まりいただきました。最初に先生方の研修先とテーマについて簡単にお教えください。

**新谷** 私は病院建築を研究していますので、日本とヨーロッパの病院建築を比較検討してみたいと思い、北欧、イギリス、ヨーロッパ大陸の病院や福祉施設を3ヶ月かけて見てきました。ヨーロッパの場合、患者本位の病院建築がなされていると言われていて、それを実際に見てきたかったです。北欧の場合は、見学の世話が非常に整っていて、大変親切に案内してもらいました。統括的な機関にお願いすれば、国内のあちこちの施設を案内してくれて、大変助かりました。イギリスでは、北ロンドン工科大学大学院に1ヶ月間籍をおいて、講義を受けながら、各地を見学しました。

**上原** 私は建築の鉄筋コンクリート建築物の解析を中心に勉強しておりますが、その分野ではインディアナ州のパデュー大学にチェン先生という有名な先生がおられます。その先生の来日を機会に知人に紹介してもらい、チェン先生のもとで勉強する機会を得ました。州立パデュー大学にはほぼ11ヶ月おりましたが、後半は大学の授業にもださせてもらいました。

**川瀬** 私はニューヨーク州立大学のハーマン教授のもとに、溶射技術の勉強に行きました。この技術自体アメリカが先進国ですし、ハーマン先生は世界的な権威です。また、この大学は最高の設備と情報を持っていますし、情報、人、物の集散地として重要な役割を果たしています。この大学の出身者は大学のある地名にちなんでストニーブルック・シンジケートという人脈をつくっています。



して、私もその一員に加えてもらうことができました。それから、この大学の近くの国立研究所でも研究させてもらいました。そこにいる研究者が私どもの研究に関心を持ち、客員研究員として迎えるので来いということになりました。こうして、人との交流という点で非常に勉強になりました。

**司会** 研究目的が建物の視察調査と大学の研究室での研究という違いはありますが、今の話にも出てきたことと関連して、在外研究の最大のメリットはどこにあるとお考えでしょうか。川瀬先生の場合は、端的にいえば人脈ということになるのでしょうか。

**上原** やはり一番の収穫はそうした人脈と絡んで、視野が広がったという点だと思います。私の研究分野については日本でもたくさんの研究があるのですが、留学で世界の研究動向にも直接接することができ、より広い視野で自分の研究を位置づけることができたし、今後の研究の方向性をいわば、世界的な視野で考えられるようになりました。

**新谷** 私の場合、実際に建物の中に入って見学するということが非常に大きな意味をもっています。しかし、病院等の場合、すぐに入れてくれるということはないのです。ところが、きちんとしたルートの紹介者をつければ、専門的な案内者がついて、こちらが要望するところをどこでも見せてくれるし、写真も撮ってくれるのであります。それはこうした機会にしかできないし、しかもこうしてできた人的なつながりはその後も大きな役割を果たしています。

**司会** 今の話ではどうも人的なつながりが一番の収穫ということになっていますが、その他にいかがでしょうか。

**川瀬** もうひとつは「充電」ということがあります。日頃高専では、自分の中に成果を蓄積し、自分を高める「充電」より、どうしても日常的な仕事という「放電」の方が優先されます。またわれわれの仕事である教育と研究、この両者とも、やろうとすればきりがないし、手を抜こうとすればいくらでも抜ける性格のものです。だから、どうしても自分に鞭打たなければやっていけないのですが、それにも限度があるし、また自分の中に何も

ないのに鞭打っても仕方ない。それを一度外に出て刺激を受けてくることで、リフレッシュする。在外研修の期間、「充電」に専念できたことは非常に大きな意味があったといえます。

**司会** 施設や環境の面ではどうですか。

**上原** 私は解析を専門にしていますが、パデュー大学の場合、コンピュータ施設についてはワークステーション、台数とも非常に優れていますし、大学院の情報教育も、土木の先生自身が行っています（建築構造の教育・研究は米国では、土木学科で行われている）。その意味で教育レベル、施設ともに進んでいると感じました。それから帰りに、実験系の施設が充実していると定評があるカルフォルニア大学サンディエゴ校に寄ってきましたが、噂に違わず、大変充実していました。



**川瀬** アメリカの場合、実験設備についていえば教授がどれだけお金をとってくるか、大きなプロジェクトをどれだけ持ってくるかによって、研究室間に大きな差があります。教授がそういうことをできるところは施設が充実しているが、そうでないと貧弱な施設しかないことになります。そこが日本と大きく違います。日本の場合はやはり平均的だと思うんです。それから、これに関連して驚いたことがあります。アメリカでは教授が大学院生を雇っているんです。もちろん院生全員ではありませんが、70、80%の院生に日本円にして200万円なり300万円なりの給料を払っています。最初、日本ではいくら大学院生に給料を払っているんだという話が出て、何のことかちっとも理解できませんでした。また、場合によつては助教授も教授が雇っているところがあるようです。

**上原** パデュー大学の場合もそうで、大学の運営費の3分の1はそうした教授が集めてきたお金で占められています。残りの3分の1が授業料、あとが州からの補助金だと聞きました。

**川瀬** 教授が集めた金の一定比率は管理費として大学がもっていくのです。州立大学といつても、州からはあまりお金は來ないようです。

**新谷** ヨーロッパの場合はあまりそのようなことはないようです。大学とは違いますが、私に関連する医療についていえば、国や自治体の拠出の割合が非常に大きい

ですね。医療施設についても、建物自体のスペースが広く、充実しています。日本では医療機械に金をかけるのですが、ヨーロッパの場合は、建物そのものを充実しようとしています。医療機械については、最低限必要なものはどこにもそろっていますが、最新の機器は特定の病院に備えればよいということで、分業体制がしっかりしています。

**司会** ここまで在外研修のメリットという点について触れてきましたが、今度は逆の面、在外研修で苦労した点などはどうでしょうか。

**川瀬** システムと言葉という障害ですね。私自身何回かアメリカに行っていましたし、言葉も、食べ物も、習慣もある程度大丈夫だろうと少し楽観的に考えて行ったわけです。ところが、絶対ないだろと思っていたカルチュア・ショックを受け、最初の1、2ヶ月は眠れない夜が続きました。一番は言葉です。システムの違いを言葉で理解しなければならない。私のような外国人の長期滞在者の場合、スペシャルな要求をするケースが多いのですが、「ノー」を交渉して「イエス」にしなければならない。その交渉がその場ではうまくできないのです。後になって、こう言っていたんだ、あの時はこう言えばよかったですんだということに気づくのです。住居探し、車の購入、銀行口座開設、保険などいろいろな面でそれを感じました。しかも、それを話す人がいないという孤独感がありました。人生で初めてそういう気持になりました。

**上原** 社会のシステムを理解する必要は感じましたが、渡米に当り、現地におられる日本人の方にお世話をいたしたり、家族と一緒に行ったということで、私自身はあまり大きなカルチュア・ショックは受けませんでした。ストレスがたまつたときには、家族と日本語で話すことにより発散できたのだと思います。苦労したのは、子供の病気のときにうまく病状を伝えられなかったことくらいでしょうか。

**新谷** 私の場合には短期だったのでそうした苦労はありませんでした。ただ、大きなトランクをもって移動しなければならなかったことや、あちこち回るので現地で



ホテルを予約しなければならなかったこと、訪問の日時が細かく決まっていたので、訪問場所への経路を前日にあらかじめ下見しなければならなかつたことなどが大変でした。言葉は北欧でも、大陸でも英語ですませることができたので、助かりました。

**司会** それでは次に日本と外国の科学技術教育の方や学生の様子の違いという点については、どのようなご感想をお持ちですか。

**上原** ご存じだと思いますが、宿題が多いようですね。毎週たくさんの宿題がだされます。しかも、それが1題に2時間も3時間もかかるような非常に高度な問題なのです。そして、それを学生に返すときには、レポート用紙にびっしりとコメントがつけてあります。必ずしも教授自身が書くわけではないですが、ティーチング・アシスタントなどを使いながら、そうした細かな指導をしています。その辺はやはり見習うべきことかなと思いました。



川瀬 アメリカでは学生が先生を評価するシステムがあります。学生が先生の教え方、内容、レベルなどについて評価表を書いて提出します。必ずしもそのせいばかりではないで

しょうが、教授は授業に真剣勝負で挑みます。厳しいけれど、相手に厳しくあたれば自分にも厳しくなければならぬ。そうした緊張感があります。また、そうしたシステムをティーチング・アシスタントが支えています。採点などは彼らがやることが多いようです。

**上原** それから休講がほとんどありません。そこは日本の大学と違います。教授がどうしても休まなければならぬときには、学生と相談して代わりの授業時間を設定します。たまたまパデュー大学で学会があったのですが、授業を受けたい学生もいるという配慮から、授業をするか、休講にするか学生に決めさせていました。

**司会** 学生の様子はどうですか。

**上原** 毎週宿題が出ますので、あまり余裕はないようです。ある期間アルバイトで学資を稼いで、それから再び学校にもどってくる人もいます。それから、学生の年令層が広く、社会人など多くて、社会に開かれた大学として生涯教育を行っています。

**新谷** 私の行った大学院では1年のフルタイムの院生と2年のパートタイムの院生がいて、前者は奨学金をもらって各国から来ている人が多く、後者はみんな働きながら、

決まった日にだけ大学に来て勉強していました。

**川瀬** 学生はよく勉強しているという印象を受けました。やはり社会のシステムが違うのですね。競争社会ですから、能力をつけなければ損をするというシステムができあがっているのです。大学を出ただけでは職は保証されない、能力を身につければ、就職もないという状況もあります。

**司会** 次にこれから在外研修に期待するもの、改善すべきところなどについて、ご意見をうかがわせていただけますか。

**川瀬** 私と新谷先生は文部省から金が出て、在外研修ができたわけですが、これは世界的に見れば手厚い制度です。それをこれからも続けてほしいし、多くの方に利用してほしいと思います。アメリカでよく「帰ったらどうするんだ」ということを聞かれ、それに対して「元の職場に戻るんだ」と答えると、怪訝そうな顔をします。学校から出ていって、そこに戻れるこの制度を大いに活用してみなさんが刺激を受けてこられることを望みます。少なくとも毎年1人、できれば2名程が行けるくらいに拡充してほしいですね。

**上原** 先ほど「充電」の話がありました。アメリカにもサバティカルという制度があります。特に、日本のような終身雇用制のところでは「放電」してしまうことが多いので、定期的に違う環境で勉強してくることは必要な気がしますし、拡大していただきたいと思います。

**新谷** 日本の場合はなかなか行きにくいですね。ヨーロッパにいると外国に行くというのは隣に行くようなものなのに、日本では外国に行くとなると大きさになる。確かに手厚い制度ですが、手厚さは拡張しなくとも、もう少し多くの人が行けたり、一度行ったらもう行けないようなことではなくて何回か行けるようにしてほしいですね。多くの人が異文化に接する機会を増やしてほしい。

**司会** 最後になりましたが、みなさん在外研修に行つてきて、ここが変わったということはどこでしょうか。

**新谷** 自分が変わったということではないですが、ヨーロッパの人々の親切さに感動しました。見ず知らずの外国人が訪ねてきても、行き届いた世話をしてくれて、親切に案内してくれました。われわれは外国人が訪ねて来たとき、そこまでするだろうか。日本人もこうした国際感覚を身につけるべきだと勉強になりました。

**川瀬** 向こうに行けばわれわれは「プロフェッサー」だったわけですが、「プロフェッサー」であるという自覚、プライドを持てました。それは研究を行う上でどれだけ自分に鞭打てるかという意味です。ちゃんとした研究ができなければ「プロフェッサー」といえないわけですから。特に最先端の研究というものは1年や2年休んだらもう何もできないので、今後も走り抜けなければなら

いなという気持になりました。これは変わったというより、以前からの思いをより強くしたといえます。そういう気持になれたことは大きな成果でした。

**上原** 研究の上の精神的余裕というのが大きいと思います。実際にアメリカの研究動向を把握でき、世界的な研究の話にもついて行けるようになりました。

**司会** 本日は貴重な話をうかがうことができました。お忙しいなか、どうもありがとうございました。



## A letter from Australia

by Tomoji Tabata



私が滞在している所は、オーストラリア、ニューカール大学の言語学及び文学コンピューティングセンターで、ここではコンピュータを用いた英仏文学のテキスト・データベースの構築と、それを基にした言語・文体の分析がグループ・プロジェクトの形で進められています。ここには大学院生時代にも滞在していたので、学生と研究者の両方の視点から、日本とオーストラリアの大学を見比べて気がついた点を報告します。

まず、オーストラリアの学生は、日本の学生に比べて、精神的にも、経済的にもひとりひとりが大人として自立しているという印象を受けます。ほとんどの学生は自分で働いて得たお金や奨学金で学費を捻出していますし、どの学生も、自分が何を、何のために学ぶのかという確固たる目的意識をもって大学に来ています。入試のレベルに合わせて志望校を選ぶ日本の学生とは、学問に対する姿勢や意識において大きな違いがあります。ですから学生は講義に対しては真剣で、講義中におしゃべりや居眠りをする学生はほとんどいません。次に、これは文化の違いもあり一概にどちらがいいとは言えませんが、日本人に比べてより言葉による自己表現を行う点、つまり自分が考えていることをはっきり言葉にして表す点があげられます。多くの人がヒューモアを交えて、雄弁にスピーチしますが、異なる文化的背景から来ている私の場合、こちらで生活していく上では、自分の意思をきちんと相手に伝えることが必要だと感じています。

一方、研究者の視点から見て両国の教育環境の違いをあげてみると、まず政府の補助が大きいので、物価の違いを考慮しても、学費はこちらのほうが安いようです。また、自宅を離れて大学に通っている学生はほとんど奨学金を手にすることができます。次に、学内のコンピュータ・ネットワーク。これは日本でも実験系の学科では常識になっていますが、人文科学系のアカデミック・ネットワークの充実度に関しては、日本の大学をはるかに凌いでいます。こうした設備は私のような研究を行っている者にとっては特にありがたいところです。もう一つ、図書館はどの大学でも床面積が広く、蔵書が豊富で、その検索システムも充実しています。

最後に、教師と学生の関係ですが、案外これが一番日本とは異なるところかもしれません。海外からオーストラリアの大学に来た学生がまず驚くのは、教師と学生の間で "How are you, Wayne? - Good, thank you. Yourself, Hugh?" といったぐあいにファーストネームでお互いを呼び合う光景ではないでしょうか。こちらの大学では教師と学生は非常にフレンドリーな、ほとんど対等に近い関係にあり、それがこうした呼びかけの言葉に最もはっきりと表れています。日本人の感覚からすると、恩師をファーストネームで呼ぶことには強い抵抗と躊躇を感じるかもしれません。賛否両論あるでしょうが、このような光景は、少なくとも教師が学生を一人前の人の間として尊重していることの反映であるよう気がします。

もっと大切なことを見落としているかもしれません、こちらに滞在して気づいたことをいくつか書いてみました。来た時、季節は秋でしたが、もうすっかり春です。残された期間を有意義に過ごしたいと思っています。

(田畠智司：一般科助手、1993年5月～ オーストラリア、ニューカール大学で研修中)

## シリーズ

## クラブ紹介

今回は文化系クラブ2つを紹介します。一つは英語研究部(ESS)、もう一つはコンピュータ研究部(コン研)。学生会文化局長の5C大里君に両部の部長にインタビューしてもらいました。



## 英語研究部

大里 ESSといえば、すぐにスピーチコンテストのことが頭に浮かぶんだけど、だいたい、いつもどんな活動をやっているんですか?

下川 そうですね、ふだんはラジオ講座の本を使って、上原先生の指導を受けていますね。それに、週1度は英検対策もやっているんですよ。

大里 それは、毎日やっているんですか?

下川 そうですね、ふだんは火・水・木の放課後にやっているんですが、スピーチコンテスト前になると毎日やっています。

大里 その、スピーチコンテストとはいいったいどういうものなんですか?

下川 まず1・2年生を対象にした暗唱部門があって、課題文の、発音や表現のうまさを競うものと、もう一つはスピーチ部門があり、自由テーマを7分ぐらいスピーチし、点数を競います。

大里 なるほど。じゃあ、かなり英語ができないと難しいですよね?

下川 英語ってやっぱり難しいイメージがあるけど、実はそんなことはなくて、とにかく実際に英語に触れてみて、少しでもしゃべれたらいいなとか、英語に関する意欲を持てば、すぐに上達しますよ。

大里 そう言われると、そうかも知れませんね。実際、そういう意欲ってのは何にしても大事ですよね。

下川 大学編入や留学を考えている人や、英検を受けようと思っている人は部に入部して損はしません。上原先生や徳田先生は渡航経験もあり、そういう先生方のアドバイスを受けられますよ。

大里 考えてみると、よくTVで英会話教室のCMがあっているけど、それより、こんなに身近に英会話が学べるところがあるのに気づかなかったとは。

今から、まったくの初心者がESSに入部しても大丈夫ですか?

下川 高専に入ってくるくらいだから大丈夫ですね。やる気があれば入部して欲しいと思います。



## コンピュータ研究部

大里 さっそくですが、現在どんな活動をしているんですか?

森山 その前に、誤解をとかないでね。

大里 誤解と言うと?

森山 この学校には、コン研はゲームばかりやってると思っている人がたくさんいると思います。

大里 あー、そういうイメージはありますね。

森山 だから、そんなにゲームばかりやっているわけではないと。各自テーマを持ち、プログラムを作ったり、新しいものを研究したりしているんです。

大里 その研究とは、例えばどんなことなんですか?

森山 新しく入った器材が、何に応用できるかといったことや、効率の良いプログラムの開発などです。

大里 話は変わるけど、部員数と活動日はいつですか?

森山 女子部員も含めて20人くらいで、基本的に学校のある日は毎日活動していますね。場所は、図書館3階の電算機室隣でやっています。

大里 コン研に入部して、良かったと思うことがなにかありますか?

森山 ありますね。やっぱり情報の成績が上がったことです。電気工学科や電子情報工学科にはとくに有利だと思います。

大里 では、これからのコン研の目標みたいなものは何でしょう?

森山 やっぱり、部員全員が情報処理2種をとることです。

大里 というと、もう情報処理2種を持っている部員もいるわけですね。それは就職にも有利でしょう。

それでは、質問はこれくらいにして、何か一言ありますか?

森山 そうですね、とにかく、コン研はゲームばかりやっているわけではないということかな。あっ、それと同時に、部員募集中!!男子に限らず、女子も気軽に入ってきてほしいですね。



## 英語弁論大会

7月28日(火)、大分高専にて第26回九州地区国立工業高等専門学校英語弁論大会が行われた。参加者はレーションの部(500ワード程度の英文を暗唱するもの、1・2年生対象)あるいはスピーチの部(7分以内の各オリジナルな内容についてのスピーチ)に参加した。本校からも、レーションの部に藤田(2A)と権藤(1I)、スピーチの部に下川(5I)が参加した。

今回のコンテストは両部門とも例年なくレベルが上がっており、残念ながら本校からは入賞できなかった。スピーチの部では下川が「民衆レベルの対話を」と題した、湾岸戦争や近年のカンボジア情勢についてのスピーチを行った。審査員はネイティブ2人を含む3名。スピーチの内容は良い評価を得ることができたが、発音についての指摘を受けた。

また、コンテスト前日にはレセプションがあり、学校の枠を越えた交流を深めることができたことは参加者にとって良い刺激になったのではないかと思う。

来年のコンテストは鹿児島高専で行われる。本校の学生も積極的に参加して欲しい。

(顧問 德田 仁)

## 第26回四高専吹奏楽部合同演奏会



8月3日(火)、18:00より標記の演奏会が大牟田文化会館大ホールで開催されました。また、それに先だって6日間の合同合宿が本校にて実施され、有明高専が当番校としてその準備および運営を担当しました。ここ数年来、各高専吹奏楽部で部員の増加が顕著であり、今回は総勢130名を越える参加者となりました。さらに、学寮の改修、全国高専体育大会の日程繰り上げなどの諸条件のため、本演奏会の実施には数々の制約がありました。しかしながら、寮務・学生主事室をはじめ関係部署の方々のご理解とご協力および学生係員の皆様の献身的な助力により、無事演奏会を終えることができました。ありがとうございました。

演奏会当日は、合宿期間中降り続いた雨も上がり、校

長をはじめとする本校関係者を含め、約600名の入場者の方々に大編成バンドの迫力ある演奏を聴いていただきました。幕間には、本校同窓会からの花束贈呈等もあり、アンコール曲「マイウェイ」を最後に盛大な拍手の中、終演しました。ご来場くださいました方々また、補助員として活躍した学生会のメンバーにお礼申し上げます。

翌日、久しぶりに戻った真夏の太陽の下、片付けを行い、合宿によって育まれた友情を胸に来年の再会を約束して各高専(北九州、久留米、大分)帰路につきました。

(顧問 吉田 正道)

## 漫画甲子園に参加して

高知県主催の第2回全国高等学校漫画選手権大会(通称漫画甲子園)に応募した。予選のテーマは「日本という国」で、部員達が知恵を絞った結果、サミットの場と思われる各国首脳談話の中で、一人日本が孤立している様子を描いた作品となった。この審査が東京であり、参加249校中、本選出場の30校内に入った。

本選は8月12日、13日高知県「ちばさんセンター」で行われ、部員4名、顧問1名で参加した。テーマは「リニューアル」、与えられた時間は6時間、熟考の末部員達はチリ箱に入っている空き缶などからロボットがダイナミックに再生されてくる様子を描き、決勝15校に残ることができた。二次決勝のテーマは「家族」であったが、惜しくも上位6校内には入賞できなかった。しかし、全国大会出場は創部以来の快挙であり、漫研部史を彩る1ページとなった。

各ブースで展開されている競技の様子を見ていると、高校生達のセンスとユーモア、アイデアの奇抜さ、作画のうまさに驚き、なるほどと感心させられるものや思わず吹き出してしまう作品が数多くあった。

大会期間中、現地では「よさこい祭り」が開催されており、地の底から沸き上がるようなエネルギーに驚いた。この祭に合わせて全国漫画選手権大会が開催されたことに、「やなせたかし」さん、「はらたいら」さん等多くの漫画家を輩出した高知県の地域振興に対する熱の入れようを感じられたことであった。

(顧問 浜田 伸生)



## ➤ 行事予定 <

- 10月 4日～8日 前期末試験  
 10月12日 後期授業開始  
 10月19日 学生会選挙  
 10月24日 学校見学会・入試説明会  
 10月30日～31日 高専祭  
 11月 1日～2日 休講  
 11月 6日 30周年記念式典  
 11月12日 30周年記念行事  
 11月13日～18日 九州地区高専ラクビー大会  
 12月 1日 習生消防訓練  
 12月 2日 冬季球技大会  
 12月17日～24日 後期中間試験  
 12月17日 普通高校系編入学試験  
 12月25日 閉寮  
 12月25日～1月7日 冬季休業  
 1月 9日 開寮  
 1月10日 授業開始  
 課題テスト(1～3年)  
 1月22日 習生球技大会  
 2月 5日 習生送別行事  
 2月15日～18日 学年末試験(5年)  
 2月20日 入学試験  
 2月21日 休講  
 2月25日 合格者発表  
 2月28日～3月4日 学年末試験(1～4年)  
 3月 4日 終業式  
 3月 5日 閉寮  
 3月18日 卒業式  
 3月16日～22日 再試験(1・2年)

本冊子中 M・Eなどとあるのは、次の学科を意味するものです。

M(機械工学科)、E(電気工学科)、I(電子情報工学科)、C(工業化学科)、A(建築学科)

### アイデア対決・ロボットコンテスト'93 地区大会でアイデア賞に輝く!

10月17日(日)熊本電波工業高等専門学校体育館において、「アイデア対決・ロボットコンテスト'93」九州地区大会が各高専2チーム、計18チームのロボットが参加して華々しく開催されました。本校からは、機械工学科と電気工学科のロボットが登場しました。電気工学科製作のロボットは初選敗退を余儀なくされましたけれども、機械工学科製作のロボットはベスト8に残り、ベスト4進出をかけて久留米高専ロボットと対戦しましたが、善戦空しく敗れました。しかしながら、アイデアの優秀さには他の追随を許さず見事アイデア賞を射止めました。この模様は、11月7日(日)に放映の予定です。

来る11月21日(日)に東京両国国技館で開催される「アイデア対決・ロボットコンテスト'93」全国大会に出場が決定いたしました。出場者諸君の活躍を期待します。



### 全国高等専門学校 第4回 プログラミングコンテスト 本選大会出場決定!

去る9月17日に、「全国高等専門学校第4回プログラミングコンテスト」の予選が「課題部門」応募21高専・24テーマと「自由部門」応募24高専・29テーマに分かれて書類審査で実施されました。本校コンピュータ研究部は2年生部員を中心となって製作した自由部門「林檎通信」を応募、Macintoshというパソコンを用いて文字と絵・音を送受信できるマルチメディアパソコン通信プログラム作品です。全国から自由部門10テーマ選抜の中にみとまり、全国大会の本選大会に駒を進めております。

本選大会は、来る11月20日(土)、21日(日)に名古屋市中小企業振興会館において催されます。コンピュータ研究部員の活躍を期待します。

## 編集後記 ◆

「有明高専だより」にはいくつかのシリーズがある。「研究室訪問」と「人物・いま」もその一つだ。本号では、ちょっと趣向を変えてこの両シリーズを扱ってみた。それが「学位取得者に聞く」と「いま何が求められているか」である。この1年足らずで、3人の若手教官が博士号を取得され、また、外国での研究、研修活動も依然活発である。そこで、このような特集記事になった次第である。固さをほぐすため、いずれも座談形式にした。愛読を乞う。新聞等を見ていると、どうやら今年は戦後最大の不作の年らしい。しかし、学校だけはいつもと変りなく、実りの秋であって欲しいものだ。

本校では、行事等案内のため、テレホンサービスを行っています。昼間・夜間を問わず利用できます。

電話番号は、右記のとおりです。TEL 0944-52-1313

### 有明高専だより 第81号

平成5年11月1日

#### 編集

有明高専だより編集委員会  
 発行  
 有明工業高等専門学校  
 〒836 大牟田市東萩尾町150  
 TEL 0944-53-1011(代)